

はじめに コルチャック先生と子どもの権利条約

1. 条約成立とコルチャック先生(Janusz Korczak(1878-1942))
子ども観 受け身の客体⇒ 権利の主体
 2. 条約実現のためのコルチャック先生の実践思想
 3. 条約内容の理解と子どもの権利
3 機能と歴史とコルチャックの位置・貢献
- 〈1〉 コルチャックの生涯と 子ども尊重の思想
背景と生涯 作品『愛』1918-1929 について
学生時代以来の「子どもはすでに人間」という思想 それ軸に思想の展開
生涯(小児科医時代から孤児院長時代)にわたるその思想の堅持と豊富化
- 〈2〉 コルチャックの思想 乳幼児期の子ども=人間への愛と尊重
子どもの主体性・一人の人格・親子(二つの生活・権利の葛藤)
↓
脇道 ⇒子ども庁と子ども家庭庁
- 〈3〉 コルチャックの子どもの権利宣言
「大憲章三つの子どもの基本的権利」(死・今日・あるがままへの権利)
大人との関係性の中で実現する子どもの権利の特性
人間としての尊重という思想=子どもの人権の確認(ニーズ\権利「変換」) right=当然
権利リストのごとく広がっていく...彼の活動の広がりでもある
・乳児の休む権利と忘れる権利
・(人間として)「尊重される権利」
5分休憩
- 〈4〉 子どもとつくる教育実践の世界と子どもたちの権利
大憲章への註記 意見表明・参加と大人の成長
子どもとの関係づくり 二つのスタンス
“研修プログラム” 孤児院の「個人としての子どもの権利」
子どもの「労働」の意味 (成長発達)
子どもと大人の「知性・感性の違い」
子どもの世界の「完全な市民性」
孤児院の実践①~⑩
問題解決の権利 生活の改善 関係の公正 専門家
仲間裁判 過ちを許し合い立ち直りを自尊と相互信頼で要求 ↘
大人も同じ生活者としてその規則に従う その意味 ⑧ピアジェのコメント
- 〈5〉 児童文学を通しての子どもの権利「対話」
『王様マチウシ I 世』から『孤島のマチウシ』
一度は大人が子どもに権利を与えたがよかったのか??? 子ども自身考えさせる童話
残された課題 子どもの権利は本来子どもの要求 しかし 大人の成長も不可欠
- 〈6〉 晩年の彼のメッセージ ジュネーブ宣言の実現を訴えつつ述べていたこと。
「育てるとは、これはつまり、子どもを匿い、守ることなのだ。
侮辱や危害が子どもたちに及ばないように…」

まとめ 以上に、見てきたように、彼の生涯において子どもの権利の実現をめざして追求していたのは、生活の保障 provision「供与」と現代の実践の水準を超えるであろう participation「参加」であった。その日常において子どもの中で人間として大事していたものを最後まで堅持しようとしていたのだと思います。子どもは、人間として、守られ、育ち、社会に参加できるよう、社会の制度を構築し、それを支える考え方(思想)をもつことが私たちには必要だと考えます。日常において、子どもを人間として大事にすること、子どもの権利を守ること、これを深く広く積み重ねていくことが、子どものことを無視した悲惨な世界を招かないことになると期待します。